「惜別の歌」について

この歌は島崎藤村の詩に、藤江英輔が曲を付した。

藤村の原詩は明治三十年に刊行された『若菜集』（春陽堂）所収の「高殿」である。その前年、藤村は三月と十一月、二度にわたって、小諸に恩師木村熊二を訪ね、ともに懐古園周辺を逍遥した時に、この詩想を得たといわれる。明治三十二年藤村は小諸義塾に赴任するが、その翌年雑誌『明星』（与謝野鉄幹主宰）に発表した「小諸なる古城のほとり」（原題「旅情」）とともに小諸郷愁の詩である。

藤江英輔がこの詩に作曲したのは、昭和十九年暮れ、太平洋戦争の末期である。当時、中央大学予科生だった藤江は、敗戦間近かの暗澹たる時代を、東京板橋にあった陸軍造兵廠に学徒動員され、兵器生産に従事していた。

同じ工場で働く学友たちに、日々召集令状が届く。再会のかなわぬ遠き別れが次ぎから次ぎへと続く。その言葉に盡きせぬ思いを、藤江はこの詩に託して曲を付した。それはいつしか出陣学徒を送る歌となった。造兵廠に動員されて来た、他の大学生・女子学生・旧制中学生も、みなこの歌で出陣学徒を送った。

そして戦後、この歌が別れを惜しむ抒情歌として一般化した時、問題があった。「高楼」を「惜別の歌」とし、「かなしむなかれわがあねよ」（原詩）を「わが友よ」に歌い替えていたことである。幸いだったのは藤村の著作権継承者の一人である島崎翁助と藤江は藤村全集（新潮社）の編集を通して面識があった。翁助はこの変更を許諾した。以後この歌は中央大学の「学生歌」として歌い継がれ、また多くの人々に愛唱されるようになった。

以上の経緯を知った小諸・佐久在住の有志は、この歌碑の建立を発願し、広く多くの協賛者と小諸市の全面協力を得て、高村豊周（千曲川旅情のうた歌碑制作者 ―昭和二年建立）の孫弟子筋にあたる金属造形家、伊藤邦介鋳造制作により、ここに成就した。

藤村詩の顕彰と、この歌に送られて再び帰らなかった出陣学徒の鎮魂を祈念して。

（敬称　略）

平成八年五月

「惜別の歌」歌碑建立実行委員会